様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２０８８

研究課題名（和文）朝鮮学校卒業生の生活世界ー＜民族＞＜祖国＞との関連を中心に

研究課題名（英文）Lives of Zainichi Koreans-Focusing graduates of Choson School in Japana

研究代表者
山本　かほり（YAMAMOTO, KAORI）

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：３０２９５５７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，朝鮮学校卒業生の生活世界を調査を中心にしつつ，検討を行ってきた。朝鮮学校の学生数が減少している要因の一部は，卒業生たちですら子どもを朝鮮学校に送らないという事実である。では，かれらは朝鮮学校やそこで学んだ「民族」，そして＜祖国＞からは距離をとるようになっているのかという問いからスタートした研究であり，かれらのネットワークのあり方を研究したものである。
　たとえ，子どもを日本学校に送るという選択をしても，民族としてのアイデンティティー，祖国（分断国家）に対しては，なんらかの複雑な態度をもちつつ，そして，卒業生たちのネットワークを強固に保ち,生活世界を形成していることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　在日朝鮮人たちの日本定住がアプリオリに考えられる状況において，「国家」「祖国の分断」などという政治的な状況が在日朝鮮人をめぐる研究の中では無視されがちである。ナショナリズムが批判的に語られる学問的・社会運動的空間の中で，在日朝鮮人たちが「国家」にいかに向き合うかという問題を考えることが，ある意味で，避けられるようになってきた。在日朝鮮人を「ディアスポラ」として語る研究が中心的な位置を占めてきたのが事実である。
　しかしながら，本研究では，在日朝鮮人が国家，特に朝鮮民主主義人民共和国とむきあうのかを正面からとりあげ，そのことの意味を考えてことに学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research focused on lives of Choson school graduates(Zainicih Koreans). Choson school has been facing difficulties in senses of political and financial. One reason for this is that quite a few graduates do not send their children to Choson School, but doee it mean those graduates cut their ties with Choson School community? This was the first question for this research. Through interviewing graduates of Choson School, I found they still keep strong relationship within their community and have somehow support network.
Also they are somehow keep their identity as Korean and trying to have a tie with their homeland, that is the divided states, Korean Peninsula.

研究分野：社会学

キーワード：在日朝鮮人　祖国　エスニシティ　国家　民族

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は，申請者自身の「朝鮮学校における『民族』の形成・獲得・変容のメカニズム」（基盤 C 2011 年～2014 年）および「在日朝鮮人における＜民族＞と＜祖国＞の意味に関する社会学的研究」（基盤 C　2016 年～2019 年，以下二つをあわせて「前研究」とする）の継続課題であった。研究代表者は，前研究では，愛知朝鮮中高級学校を主たるフィールドとして，参与観察および朝鮮学校関係者へのインタビュー調査を行ってきた。そして，個人の人生における朝鮮学校経験がもつ意義を考察し，朝鮮学校は，朝鮮人であることを否定されがちな日本社会において，在日朝鮮人が「当たり前に朝鮮人としていられる」空間であり，緩やかな民族の共同性と連帯の核となる場であることを明らかにしてきた。

研究を進める中で，朝鮮学校卒業生たちがもつネットワークに関心を持つようになった。「朝鮮学校コミュニティ」（曺，2011 等）と呼ばれる「朝鮮学校同窓会」がフォーマル/インフォーマルにどのように機能しているかの？これまで朝鮮学校が輩出した卒業生は実に多様で，朝鮮学校教員および総聯やその関連団体，企業の専従職員がいるのは特徴的ではあるが，それ以外に在日朝鮮人に多い自営（飲食，産廃業，建設業），医師などの医療専門職，弁護士や公認会計士，税理士，また，日本企業等での会社員などがいる。そして，かれらは，相互につながりをもちサポートをしあっていることが前研究の調査の過程でみえてきた。さらに，そもそも 70 年間も各地で朝鮮学校が存在し続け得たこと自体，やはり「朝鮮学校同窓会」とでもいうべき卒業生たちの強力なサポートがあってこそのものである。朝鮮学校の創設期にスローガンとなった「力のある者は力を，金のある者は金を，知識のある者は知識を」が今でも同窓生の中に受け継がれ，慢性的財政難にある学校（教員の給料も満足に出ない学校がほとんどである）を存続させてきた。

その卒業生たちは，今現在，朝鮮学校における教育（民族観，祖国観など）をどのように受けとめ，そして今を生きているのだろうか。卒業生であっても，朝鮮学校に自分の子どもを送らない人もいる。送らない人は朝鮮学校を「否定的」に語りがちではある。しかし，それでも卒業生同士，緊密な関係をもち，学校の支援にも参加する。まずはこのような卒業生のネットワークの実態を把握しようとした。さらに，朝鮮学校卒業生にとって，＜民族＞や＜祖国＞，さらに端的に言って朝鮮民主主義人民共和国はどのような存在なのであろうか，また，では韓国に対してはどのように考えているのだろうか等々，朝鮮学校を社会学として立体的に捉えるには，多くの課題がある。本研究では，朝鮮学校同窓生たちの生活世界をミクロにエスノグラフィーとして描き，そして，朝鮮学校はどのような学校なのか，内在的に理解することを目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は朝鮮学校卒業生たちの生活世界を把握し記述することにある。すなわち，「朝鮮学校同窓生」たちのエスノグラフィー研究である。朝鮮学校は，日本各地で民族教育を実践し，幼稚園から大学レベルまで体系的な民族教育を在日朝鮮人に提供している。朝鮮学校は，これまで 70 年以上，在日朝鮮人が，日本社会の差別と排斥に抗しつつ，自分たちの民族的な共同性・有機的な連帯を生成する場であり続けた。本研究では，このような民族的共同性や連帯が朝鮮学校卒業生の卒業後の生活世界でどのように機能するのか/しないのかをミクロなレベルで把握することを目的とした。また，朝鮮学校卒業後，各人が日本社会に向き合う時，かれらが意識化し実践する民族とナショナリズム，さらに民族関係の形成プロセスを考察し，それを描くことを目指す。つまり朝鮮学校的な世界の連続性/非連続性を読み取ろうという試みであった。それを通じて朝鮮学校における民族教育を当事者の目を通じた再解釈プロセスの記述を行い，とかく，日本社会からは，バッシングの対象になりがちな朝鮮学校を立体的に描くことを目的とした。

本研究は，朝鮮学校がどのような学校なのか，朝鮮学校の卒業生たちの生活世界を描くことを通じて理解する社会学的研究であった。その目的は，朝鮮学校卒業たちへのフォローアップインタビューと現在の朝鮮学校での参与観察を同時平行で行うことを通じて，朝鮮学校的な世界の連続性/非連続性を明らかにすることにあった。さらには，この 20 年，スローガンのように言われる「多文化共生」社会の実現にむけて，多くの朝鮮学校卒業生たちが日本社会でどのように生きているのかを明らかにすることは重要な課題でもあろう。本研究のベースにはこうした実践的な問題意識がある。

３．研究の方法

（1）愛知朝鮮高校における行事，総聯支部（部会），また在日朝鮮人たちの趣味のサークル（スポーツや芸術のサークル団体）等での参与観察（2020 年度～2022 年度）

（2）卒業生たちへのインタビュー調査（2020 年度～2023 年度）　1）朝鮮大学校（以下，朝大）進学者および卒業した者：朝鮮大校における生活世界はかなりがそれまでの朝高生活と重なる部分がある。しかしながら，全寮制で「集団生活」を教育の柱とし，全国からの在日朝鮮人学生と知り合う場所でもある。朝大生へのインタビューそして，そこを卒業した者が現在どうしているのかをフォローアップをした。卒業生の多くが朝鮮学校，総聯本体，関連団体・企業への就職をするが，日本の大学院に進学して研究者になったもの，弁護士等の専門職も多数輩出している。

最近は朝大内にも就職支援室が設置され，日本の企業などへの就職支援も開始したので，日本の企業等にも出た卒業生たちへのフォローアップ実施。2）日本の大学等進学者および卒業した者：このグループは大きく二つに分かれる。ひとつは，在日本朝鮮留学生同盟（留学同）という総聯傘下の日本の大学等に在籍する在日朝鮮人学生団体に参加するものたち。もうひとつは，そこには参加しない者たち。前者はアクセスが比較的容易ではあるが，後者へのアクセスも可能にすべくこれまで関係を維持してきた。3）就職した者：朝高卒業後の就職の多くは在日朝鮮人企業，総聯の機関であるが，一部，日本の会社に就職をした卒業生たちもいるので，フォローアップを実施。4）「トランスナショナル」な選択：留学，就職，起業等，海外で生活をする卒業生も数は多くないがいる。渡航先は，韓国（朝鮮学校の政治的立場とは矛盾するが，韓国での生活をする者は決して少なくない），オーストラリア，ヨーロッパ，中国，東南アジア諸国である。日本に戻る機会をねらって調査を実施した。
（3）愛知朝鮮中高級学校における参与観察継続：現在の朝鮮学校をフォロー（2020 年度～2023 年度）

４．研究成果
（1）単著出版　これまでの在日朝鮮人研究を含めて『在日朝鮮人を生きる−＜祖国＞＜民族＞そして日本社会の眼差しの中で』（三一書房，2022 年）を出版し，本研究課題以前の研究成果も含めて単著としてまとめることができた。
（2）ソウル大学校社会科学大学人類学科での講義　招聘を受けて朝鮮学校研究の成果をまとめて講義した（韓国語）。コロナ感染が拡大していたので，オンラインにて行った。
（3）そのほか，研究計画，方法にしたがって，コロナ渦での困難はあったが，可能な限り，調査を行い，現在，その成果を学会報告などを行うために鋭意まとめている最中である。
（4）また，研究遂行の中で，新たな課題も生まれ，共同研究として，2024 年度からの科研に応募，採択されたので，その準備をすすめている段階である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山本かほり	４．巻 14
２．論文標題 「北朝鮮言説」と朝鮮学校ー朝鮮高校無償化裁判支援を通じて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東海社会学会年報	６．最初と最後の頁 15　26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山本かほり	４．巻 19・20
２．論文標題 「北朝鮮言説」と朝鮮学校	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西日本社会学会年報	６．最初と最後の頁 38-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山本かほり
２．発表標題 在日朝鮮人の民族教育――朝鮮学校をめぐる問題を中心に
３．学会等名 西日本社会学会　第79回大会　シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山本かほり
２．発表標題 排外主義と在日朝鮮人―朝鮮学校をめぐる問題を中心に
３．学会等名 東海社会学会　大会シンポジウム
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

1．著者名 山本かほり	4．発行年 2022年
2．出版社 三一書房	5．総ページ数 326
3．書名 在日朝鮮人を生きるー＜祖国＞＜民族＞そして日本社会の眼差しの中で	

1．著者名 山本かほり	4．発行年 2020年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 440
3．書名 社会再構築の挑戦	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関